

ディルタイの精神科学から見た知識習得と授業展開 に関する研究

森, 邦昭

<https://doi.org/10.15017/1500439>

出版情報：九州大学, 2014, 博士（教育学）, 論文博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

氏 名 : 森 邦 昭

論 文 名 : デルタイの精神科学から見た知識習得と授業展開に関する研究

区 分 : 乙

論 文 内 容 の 要 旨

教育とは字義的には教え育てることであるが、より具体的には教授者が知識や技能を教授して、これを学習者に身に付けさせることだと考えられる。この教授＝学習過程を教授者側から見るか、それとも学習者側から見るかによって、学校教育における知識習得や授業展開に関する見方は異なってくる。ここには、教育学説史的に言えばヘルバルト主義教育学と改革教育学ないし新教育、学力論争的に言えば系統主義と経験主義、教育方法的に言えば教師中心主義と子ども中心主義といったような対立図式が存在している。このような対立をめぐる論争は洋の東西を問わず古い時代から見られるが、すでに日本の戦前期においても学力論争が行われ、戦後には少なくとも4回の論争が数え挙げられている。こうした問題については、教育哲学の分野においても、学力とは何かとか、教えることと学ぶことはどう違うかといったようなテーマで折に触れて研究課題として取り組まれてきた。そのなかでも、たとえば宇佐美寛、田中毎実、中田基昭などが教育哲学による授業研究を行っているといえられている。とはいえ、こうした研究における問題設定では、どう教えるべきか、どう学ぶべきか、あるいは教授者と学習者の人間関係はどうあるべきかといった視点のいずれかに中心点が置かれていると思われる。それに対して本論文では、教授者や学習者といった区別に拘泥しないで、そもそも「人間の生」とはどのようなものかを解明するところが中心点になるべきだと考えた。そして、デルタイの精神科学の考え方に着目した。なぜならば、こうした問題に関して、デルタイの精神科学がきわめて本質的な議論をしているからである。

デルタイは精神科学において、知情意の全体における人間の生を解明しようとしただけではなく、実際に歴史に現れた形而上学や世界観、さらには自然科学も含んだ諸科学の展開を人間の総合的な知性として捉え、「歴史的理性批判」を遂行していった。本論文では、デルタイの思想全体をどう捉えるかという問題から考察を開始し、第1章「デルタイにおける精神科学」で、精神科学を基礎づける計画の中心点が認識論的論理学という考え方にあることを明らかにした。つまり、デルタイの思想の中心点には、人間が認識したり知ったりする仕組みを解明する理論が据えられているのである。第2章「精神科学の対象と方法とその理念」では、精神科学の理念は、人間が自己自身で決断しなければならない領域の知識に精神科学がかかわるという点に存することを明らかにした。その上で、「解釈学的概念」という概念の重要性に言及した。解釈学的概念とは、事柄の本質を的確に把握する言語的表現をはじめて可能にする概念であり、この概念のお蔭で生の理解の解釈行為が可能になっている。それとともに、この概念が人間の創造性のもとになっている。第3章「精神科学から見た知識習得」では、精神科学というものが、人間が人間を人間にする行動様式を基礎づけるだけでなく、この行動を意識化させたり反省させたりすることを明らかにした。この点から知識習得とはどんなことかについて言えば、知識を習得すること自体が、そもそも一人の人間が生きていくということと同一の事象になっていることが判明する。

とはいえ、意識的ないし意図的に知識を習得するためには、学習を行うことが必要である。第4章「知識習得のための諸条件」では、ハイデガー的な考え方から、単なる「学習の機能上の問題」ではなく、「学習を成立させている動的な本質」や「学習そのものの内在的な動因」がどうなっているかについて考察した。ここから、知識習得のためには、時代や社会からの必要ということと、実存からの必要ということが二大条件になっていると考えられる。では、知識習得のメカニズムを脳科学の立場から見れば、どう見えるのだろうか。第5章「脳科学から見た知識習得」では、記憶力を増強させるには、結局のところは「やる気」に尽きると言われていることを明らかにした。その「やる気」がどこから来て、どのように作用しているかという観点から、第6章「学習するとはどんなことか」で、ディルタイの「生の範疇」という考え方について考察した。人間がこの基本的にして=決定的なものと、非本質的なものと、どうでもよいものとの区別をするのは、人間が生範疇（実在的範疇）を通り抜けていく仕方で「生の分節化」を行っているからである。こうした考え方から、「生の連関全体における生の分節化としての学習」という見方が導き出される。そして、この見方から、学習のあり方について考えることが最も本質的に重要ではないかと思われる。

第7章「教育における認識と言葉」では、ディルタイの実在的範疇、特に本質性に着目して、認識の本質を言葉でどう言い当てるかについて考察した。この問題は、教師が児童生徒にどんな言葉をかけるか、どんな認識をもたせようとするか、またこれをどうつかみ取ってくるかという問題である。第8章「事実認識と授業展開」では、人間が意志をもって行動することができるのは、その人間のなかにその人間をその行動に駆り立てる認識が成り立っているからだという観点からの授業展開のあり方について考察した。この授業展開の考え方は、ボルノウの言う「訴えかける教育学の必要性」を示しているのではないかと考えられる。第9章「読み物資料を用いた道徳授業」では、「ジレンマ資料」と呼ばれるタイプの資料を題材にして、道徳的思考のあり方について考察した。この思考を進めていく過程においては、ディルタイの言う実在的範疇を用いる必要があることを明らかにした。第10章「道徳的ジレンマとどう向き合うか」では、正義論における議論と対照させながら、「道徳の神経哲学」における脳のジレンマ解決システムについて考察した。そして、この場合は、脳全体の状態、つまり人間の心の全状態を前提に置く必要があるという観点からさらに考察を進め、「共感力」の重要性を明らかにした。また、この共感力のメカニズムは、ディルタイにおける「抵抗概念」という概念から説明ができるのではないかとすることを明らかにした。最終章となる第11章「授業展開をどう構想するか」では、フンボルトによる大学改革を手がかりにして、学習者の興味を引き出して、主体的に考える力を身に付けさせるための工夫について考察した。この課題は、主体的学習をめざすかぎりにおいて、どの教育段階でも共通して必要とされていると思われる。過去の実践例、現在の実践例においても、あるいは将来の方向性においても、その考え方の基本は、ディルタイの言う「抵抗経験」を軸にして「生の範疇」を通り抜けていくような仕方で「生の自己分節化」が生じるような学習を成り立たせることを求めることに焦点づけられているように思われる。それゆえに、知識習得と授業展開に関する諸問題をディルタイの精神科学の立場から見ることに、きわめてアクチュアルな意義があるのではないかとと思われる。

教育は、学習者をタブラ・ラサ（白紙）と見立て、そこに認識作用を植え付けることによって成立するわけではない。教育哲学的な意味での「学習論」ないし「授業研究」では、学習者の覚知のメカニズムをあるがままに解明することが最も重要である。そのメカニズムに沿って学習が進めば、「表面的な学習」は「深い学習」（優れた転移可能性をもつ学習）となり、「表面的な教授」は「深い教授」となることが期待される。ところが、「深い学習」は「主体的な学習」でもあるがゆえに、「深い教授」は「教えられることから解放する教授」でもなければならぬことになる。これはまさに教育における逆説であるが、その解明は今後の課題である。